

皆さん、お早うございます。倫理号です。今朝は5:00頃から仕事にいきます。どうしてか、  
なる。仕事の後取り等々。この時期で年度末の決算化等、定数にさせていく  
てです。

今週の

倫理

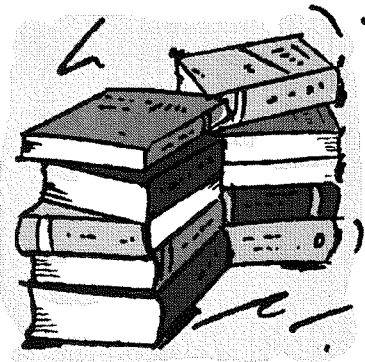
11月のテーマ | 本からの学び

章也軍が 一鳥

2021. 11. 13 ~ 11. 19

1255号

「太上は天を師とし、其次は人を師とし、其  
次は経を師とす」(佐藤一斎著『言志録』)  
この言葉は、学びを追究する人が、どの  
ように学んだらよいのかを示したもので、  
優れた学び方は、まず「自然」を師とする  
こと、続いて「人」、そして「書物」という  
順番だと教えてくれます。  
三番目の「経(書物)」からの学びといっ  
ても、その方法や目的は様々です。技術を  
習得するために読むこともあれば、生き方  
の指針を得るために読むこともあります。  
たとえば、鹿児島に伝わる『島津日新公  
いろは歌』の、「いにしへの 道を聞きても  
唱えても わが行ひに せずばかひなし」  
は、ただ聞いたたり、読んだりするだけでな  
く、それを実践することの重要性を伝えま  
す。この歌の影響からか、同県には「泣こ  
よかひつ飛べ」「議を言うな」という、理屈  
を考えるより先に行動に移すという内容の  
方言が今でも使用され、県民性に少なから  
ず影響を与えてきました。  
同じように、行動に重きを置いたものと  
して、気づくと同時に行なう(悟ると共に  
働く)ことを、四十歳過ぎてから実践した  
のが、倫理運動の創始者・丸山敏雄でした。  
その足跡を知る方法として、高橋徹著『純  
情(すなお)に生きる 稀代の教育者 丸山  
敏雄』があります。  
同書は、倫理研究所の専門研究員である  
著者が、できる限り主観を交えず、事実を  
ありのままに記したことにより、素顔の丸  
山敏雄の人となりに触れることができます。



## 「書物に学ぶ」 ～学ぶはまねぶ～

教育者としての不拔の信念を求め、師範  
学校の教頭職を辞して進学した広島文理科  
大学時代。また、真理の更なる探究のため  
に、師範学校校長職を辞して入信した、宗  
教研鑽の時代。その後の艱難辛苦の時期を  
経て、日本の再建を決意した昭和二十年九  
月三日。ここから倫理運動の萌芽に繋がっ  
ていきます。

また、同書の「はじめに」では、創始者  
が逝去した後の火葬場での出来事を取り上  
げています。火葬担当者が遺骨を見て「こ  
の方は健脚家でしたでしょう」と、性格や  
生活ぶりをことごとく言い当て、参列者を  
驚かせたのでした。生前の創始者の歩みは  
周囲が小走りにならないとついていけない  
ほどであったといえます。

先人たちの生涯を描いた伝記などを読み、  
その生活ぶりを模倣することは、経を師と  
するだけでなく、そこに描かれた人を師と  
することにも繋がります。

「学ぶ」は、「まねぶ」から来ていることで、  
まねをすることからはじまる。感化といっ  
つのも、尊敬のあまり常に崇拜していると、  
その人の人格がうつってくることをいう。

(『実験倫理学大系』)

大自然の法則を発見し純粋倫理を提唱し  
た丸山敏雄は、晩年まで生命の源でもある  
太陽を拝し、「太陽のひとつ」と呼ばれました。  
その人に学ぶことは、自ずと自然を師とす  
ることにも繋がります。同じ書物も個々人  
の読み方によって、そこからの学びは歴然  
とした違いが生まれてくるのです。